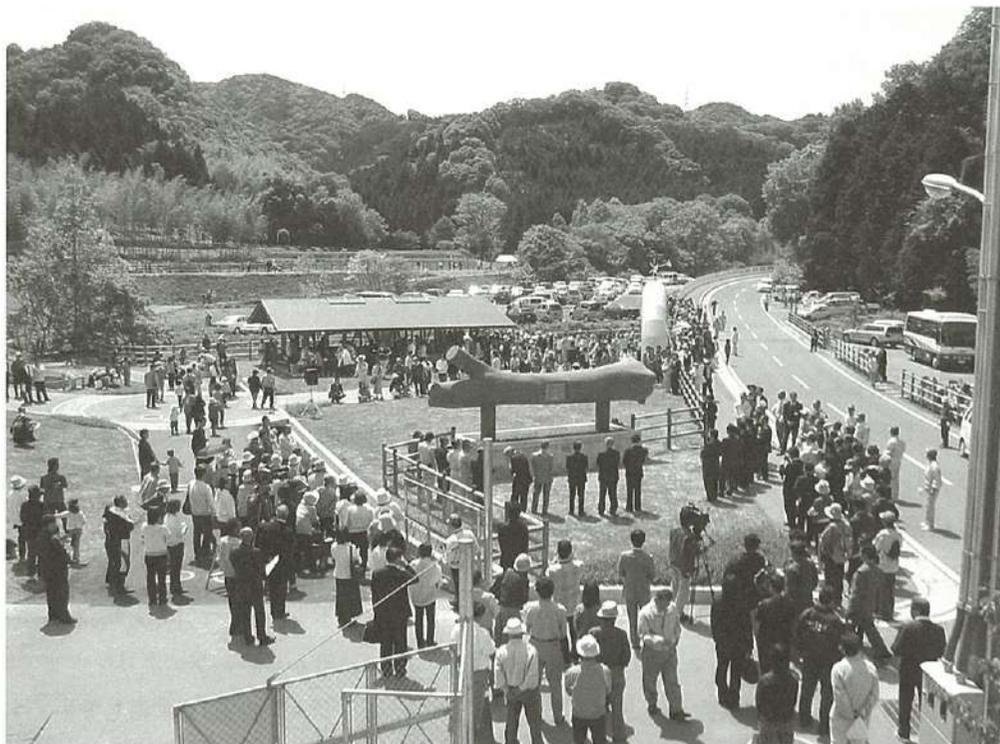


アルパック ニュースレター

VOL. 126

発行/2004年
7月1日

ISSN 0918-1954



モニュメントの背後にひろがる12haの農業庭園（本文中に関連記事があります）

目次 contents

・ Growing Up ・ 京都試作ネット	2
・ 「みなとのとびらフェスタ」に1万人が集う	4
・ 7回目を迎えたちょっと愉快的な酒蔵コンサート	6
・ 奥貝塚・彩の谷「たわわ」がグランドオープン	8
・ 「おおさか水土里の支援ルーム」が開設されました！	9
・ 子どもと年寄り	10
・ けいはんなのまちづくりを考える	12
・ 国道1号起終点都市再生の連携アピール	13
・ 三輪会長、日本都市計画学会功績賞を授賞	14
・ メディア・ウォッチ	15
・ まちかど	16

Growing Up・京都試作ネット

～ものづくり千二百年の都から 世界に「試作」をお届けします～

〔京都事務所／高野 隆嗣〕

ものづくり1200年の都から

「京のまち」と聞いて思い浮かぶもの。清水寺、祇園祭、二条城、嵐山、舞妓さん…。和装産業のまちや大学のまちという顔もあります。そして西陣織や清水焼など伝統工芸にはじまり、島津製作所や京セラ、オムロンなどの「ベンチャー企業」まで、「ものづくりのまち」という顔も忘れてはなりません。

今日、「ものづくり1200年の都」に新たな柱を打ち立てようとしている企業家グループがあります。「京都試作ネット」です。

京都試作ネットは、今年活動4年目を迎えます。「今日的な到達点の評価と今後の展開を研究したい」との発意から、昨年、(財)京都高度技術研究所を通じて弊社にご相談いただきました。

「あらゆる試作請け賜わりマス」

産業政策に携わる行政マンや研究者には周知のところですが、京都試作ネットは京都府南部地域の機械金属関連分野の中小企業経営者の交流組織（機青連）の活動から生まれた任意団体です。我が国の製造業が国際競争力を弱め、大企業と下請け中小企業による垂直分業が競争力を失う中で、「我々の持つ要素技術とお互いのネットワークを武器に、新たな展開が出来ないか」との思いから、平成13年7月に結成されました。

京都試作ネットのミッションは、「『試作』に特化したソリューションの提供」活動を通じて、「新規の顧客開拓&分野開拓」による「下請体質からの脱却」を図ることです。

「ご相談から2時間以内に返信します」

中心的な活動は、専用ホームページ(<http://www.kyoto-shisaku.com/>)を通じて「試作」に

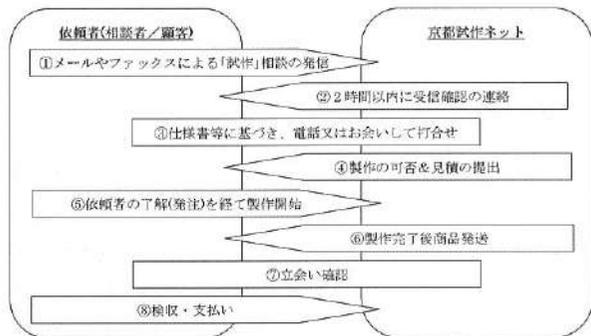
関する「相談」を随時受け付けることです。寄せられた相談はメンバーに即座に携帯電話を通じて伝達され、依頼者に対して「2時間以内」に返信し、話がまとまれば実際の試作製作まで取り組むことになります。

「あらゆる試作相談」への丁寧な対応、「2時間対応」という素早いレスポンスが反響を呼び、約3年間で800件を越える相談が寄せられています。メディアや各種シンポへの登場も増え、注目度が高まっています。

なぜ「試作」にこだわるのか

活動コンセプトである「試作」は、ものづくりや研究開発の分野において、アイデア段階から最終製品に至る過程で、「ニーズを形にする作業」の全般を対象としています。ターゲットも大企業の開発部門や大学・研究機関など、「開発のアウトソーシング」であり、あらゆる分野・領域の設計からエンジニアリングまで幅広い「ソリューション提案」を網羅しています。

□京都試作ネットの受注システム



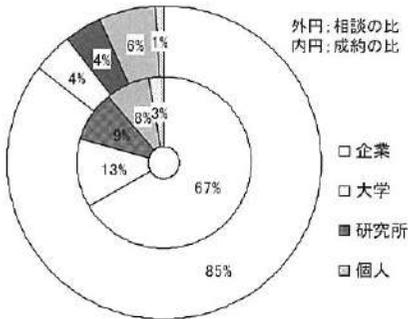
□ケータイ国際フォーラム (H16.3)



この他の 主な出展展示会

- 機械要素技術展 (東京・大阪)
- 国際金属工技術展
- 中小企業テクノフェア

□京都試作ネットの相談者・顧客属性



これまでの実績でも、成約率はおよそ2割に達しています。相談者の8割以上は大企業ですが、大学・研究機関からの相談の成約率は5割にのぼり、「アイデアを素早く形にする」という取り組みが高く評価されています。

世界一の試作産地を目指して

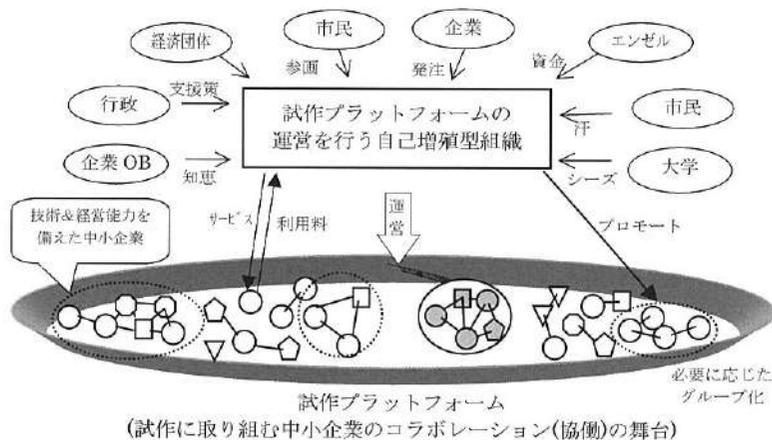
京都試作ネットの目標は、京都における新たな産業活力の源泉として「試作産業」を育て、「世界一の試作産業集積地を京都につくる」ことです。そのため、優れた「要素技術」と「経営能力」を備え、京都に試作の産地をつくるという「志」を持った中小企業家を増やすこと。そして日常的なコラボレーションの舞台として、「試作プラットフォーム」をつくることが目標です。

10年後には、試作プラットフォーム参画企業の製造品出荷額を1500億円(京都市の製造品出荷額の5%程度)にすることをベンチマークとしています。これまでは、立上メンバーである10社で取り組んできたため、東大阪のロダン21やアドック神戸など他地域の企業グループに比べて排他的な印象もあるようですが、今回規約も整備し新たな仲間を迎える準備も整えました。

大企業や大学等との研究開発に係るアライアンスなど、活動領域は拡大しています。「分離発注は手間なのでフルセット発注したい」とのメーカーの打診や、開発部門との共同開発も進行中です。立命館大学等との共同でNEDOの補助金を受けた「パワー増幅ロボット」や、経済産業省の委託事業で、京町家を活用したまちなかで試作を行うための工房づくり「MMF(Micro-Module-Factory)プロジェクト」も着手しました。改めてご報告できる日が楽しみです。

「世界の工場 中国」に対し、「世界の開発センター 日本」を実現するためにも、「伝統と革新の融合」を持ち味とする京都における「試作クラスター都市」づくりの取り組みに、ご期待下さい。

□試作プラットフォームのイメージ



「みなとのとびらフェスタ」 (舞鶴市民の手づくりイベント) に1万人が集う

〔大阪事務所／森脇 宏〕

5月5日、舞鶴市西港で市民の手づくりイベント「みなとのとびらフェスタ」が開催され、約1万人が集いました。弊社は、1年半ほど前から舞鶴の「みなとまちづくり」調査に関わり、その延長上に実施された今回のイベントでも、企画・実施等のお手伝いをさせていただきましたので、その経緯等をご紹介します。

イベントの概要

イベントの主催は「舞鶴みなとまちづくり協議会」で、「まちづくりサポートクラブ」という既存のNPOを中心に、青年会議所等や個人が参加した市民主導の組織です。

舞鶴港（特に西港）では、これまで市民がみなとを訪れることが少なかったことから、「みなとのとびらフェスタ」と名づけられました。5月5日に大型客船「あすか」が入港することが判明しましたので、「あすか」が係留する岸壁の近くで暫定供用されたばかりの港湾緑地を舞台に、イベントを開催することになりました。

イベントの内容は、多国籍屋台村を中心に、海外の民族舞踊やジャズ演奏のステージテント、シーサイドカフェ、釣り大会などです。事前宣伝として、舞鶴市の広報誌、港湾関係機関のホームページ、新聞へのチラシ折込等も行い、こうした効果もあって約1万人の方に集っていただきました。当日のアンケート結果から、舞鶴市民の参加者は約6千人と推計されましたので、舞鶴市の人口9万人強に比べると、かなりの参加率だと思います。

イベントに至る過程

今回のイベントは、舞鶴の「みなとまちづく

り」の一環として実施されたものですので、ここへ至る過程を次に紹介しましょう。

前述のように1年半ほど前から、舞鶴では国土交通省による「みなとまちづくり」調査が実施されていました。「みなとまちづくり」とは、みなとまちの個性ある発展のため、みなとの資産を市民の視点から再評価し、最大限に活用していくことを目的としています。したがって、調査に当たっては、地元関係者や「みなとまちづくり」の担い手として期待されるメンバーを中心に「舞鶴みなとまちづくり懇話会」（座長：角野幸博教授〔武庫川女子大学〕）を設置し、国土交通省、港湾管理者である京都府、舞鶴市は、オブザーバーとして参画していただきました。また、「みなとまち」に対する市民の要請を多面的に把握し、「みなとまちづくり」構想に反



大型客船「あすか」とシーサイドカフェ



多国籍屋台村（奥）とステージテント（手前左側）
写真上下：いずれも「みなとまちづくり協議会」の
ホームページ< <http://3710machi.or.tv/> >より

映するため、(1) 関係機関等へのヒアリング、(2) 市民ワークショップを実施し、その結果を「舞鶴みなとまちづくり懇話会」に報告して、議論を深めていただきました。

関係機関へのヒアリングでは、「みなとまち」に関わりのある市民団体、港湾関連事業所、行政機関、中学校、遊覧船事業者、漁協、観光ボランティア、近隣寺院の住職等、計12人にヒアリングを行いました。また、市民ワークショップでは、舞鶴市の広報誌や港湾関係機関のホームページ等で参加者を公募し、次のようにタウンウォッチング等を2回行い、「みなとまち」への要請を把握しました。

まず第1回ワークショップでは、テーマを「みなとまち再発見」とし、参加者29人を3グループに分け、それぞれ異なるコースで「みなとまち」のタウンウォッチングを行い、グループごとに「いいところ」「悪いところ」等をマップに整理して、相互に発表しました。続く第2回ワークショップでは、テーマを「海上視察&アイデア提案」として、参加者32人で船上から「みなと」を視察したのち、3グループに分かれて点検マップをつくるとともに、「みなとまちづくり」のアイデア提案をまとめ、相互に発表しました。



ワークショップ（グループでの意見交換）

取りまとめた「みなとまちづくり」構想では、「市民が自信（プライド）と愛着（アイデンティティ）を持てる『みなとまち舞鶴』をつくる」ことを基調に、基本的考え方や具体的な展開イメージも例示的に提案しました。

市民の中での盛り上がり

こうした検討過程の中で、港湾行政と市民との相互理解が深まり、できるものから取り組もうという機運が生じて、みなとで市民の手づくりイベントを行うことになりました。そこで、「みなとまちづくり懇話会」参画の既存NPOの方々を中心に、「みなとまちづくり協議会」が設置され、独自のホームページも立ち上がりました。イベント企画と準備に集中した時期には、毎週、夜間に10数人が会合を積み重ねるという熱気に満ちた取り組みとなりました。また、イベントの準備等に国土交通省の助成が得られたため、その一部を用いて協議会から業務委託があり、弊社は業務としてお手伝いできました。

舞鶴での「みなとまちづくり」は、緒についたばかりですが、今後も引き続き、協働の取り組みの多様な積み重ねを期待するとともに、そのお手伝いできればと思っています。



ワークショップ（グループごとの発表）

7回目を迎えたちょっと愉快的な酒蔵コンサート

〔名古屋事務所／尾関 利勝〕

名古屋の地酒

地酒ブームといわれて久しい。愛知には10年程前までは約60軒の地酒蔵元があり、国税管内の名古屋には約15軒の蔵元があったが、全国的な日本酒の衰退傾向とともに、この地域でも蔵元が減少し続けているものの、今でも県内で約50軒、名古屋では9軒ほどが醸造を続けている。友人の蔵元から聴いた話である。名古屋市内に地酒の蔵元があると言うだけで驚かれることがしばしばだが、実は愛知が明治までは知多の半田を中心に、江戸に酒を供給する国内有数の産地だったことは、今はあまり知られていない。

愛知の酒と言えば奥三河・設楽の「空」はじめ銘酒がいくつかあるが、最も売れているのは尾張・清洲の「信長鬼ころし」だそうだ。早くから低価格のバックで販売したこと、加えて全国に七蔵元があると言う鬼ころしの名の効果が大きいと思える。私が好きな地酒は国際空港が来年開港する常滑の「白老」だ。地味な酒だが味わいがあって人気が高い。

酒蔵コンサート

名古屋の蔵元の一つ、北区山田町にある金虎酒造の酒蔵で年二回酒蔵コンサートを開催して4年目になる。この6月5日(土)で7回になった。名古屋で金虎?、大阪じゃないのかと阪神ファンに言われそうな銘柄であるが間違いない。ちなみに同じ北区清水に白龍という蔵元があるから、地元ドラゴンズファンには面目躍如というところである。

7回目を迎えた今回は金管五重奏で、秋の木管五重奏と交互に開催している。奏者は愛知県立芸大教官と名古屋フィルハーモニー管弦楽団員で構成され、会場にちなんで金虎金管五重奏団=Golden Tiger Brass Quintettと称している。自称酒席奏者達の洗練されたわかりやすいクラシックの演奏に笑いを呼ぶ洒脱な解説を交え、休憩時間にはヨーロッパのオペラハウスにまねて御神酒を出し、コンサートの開放感を盛り上げ、演奏終了後には奏者を交えた飲み放題の酒席の宴を設けているのが、このコンサート人気の所以である。

手作りコンサートだからいつも準備もPRも直前のドタバタなのだが、それでも毎回100人前後の聴衆を集め、今回も聴衆は裏方をあわせて120人ほどが集まった。

スタイルは本格的だが、日本の常識では型破れコンサートだから正統派クラシックファンは少なく、大半が普段音楽になじみのない聴衆で、こんなに元気の出る楽しい音楽会は初めてと次から常連になる人たちが増えているのは主宰者冥利につきる。これまでの聴衆は延べで約800人、リピートを考慮すると正味400~500人に聴いて頂いた勘定になる。

コンサートのきっかけ

コンサート奏者の中心は県立芸大管打楽器科助教授で自称酒席トランペッターでもある武内安幸先生だ。確か7年ほど前、ナディアパークにあったアルバック会議室でほぼ毎年行われて



第5回コンサート風景

いたワグナー協会名古屋地区例会に、ワグナーのオペラで有名なバイロイト音楽祭日本人初のトランペット奏者として活躍されていた先生が東京から講師として来られ、バイロイトの裏話をお聴きした。話が面白く、即座に行ってもいないバイロイトのファンになってしまった。この時以来、酒席音楽家と酒席都市計画家とが昵懇になったのは言うまでもなく、それから2年ほど後、県立芸大に赴任された先生と再会、たちどころに酒席が復活した。全国の酒はおろか世界の酒にも詳しい先生に名古屋の地酒を紹介したことから、酒蔵コンサートを始めることになるまでにさして時間を必要とはしなかった。

名古屋の地酒・銘酒吟醸本丸御殿

世界デザイン博が開催される1年前から、この盛り上げを兼ねて名古屋城本丸御殿再建運動「金しゃち連」を様々な職業の市民や市役所職員と始めた。その後10年ほど続けて「本丸御殿フォーラム」に改組した。金しゃち連では市民への御殿再建PRとともに、毎年名古屋市に寄付をしてきたのだが、一向に本丸御殿が再建される兆しが見えてこない。せめて酒でもと相談を持ちかけたのが名古屋の地酒の一つ、金虎酒造だ。はじめは蔵元が実験的に仕込んだ酒だが、当初の純米酒からその後吟醸に発展、誕生以来10年も経つと酒も本物になってくる。御殿は建たなくとも酒に人気が出始めた。このころ出会った武内先生がすっかり銘酒本丸御殿のファンになってしまった。ここからコンサートに発展する。

話は後付になるが、名古屋城が米軍による名古屋大空襲で焼失したのが終戦間近の1945年5月14日、同日、金虎酒造もそのほとんどを同じ空襲によって消失した。この年、筆者と金虎酒造の若旦那水野氏が誕生しているのも不思議な縁と言わざるを得ない。

酒席が取り持つ宴の縁

本丸御殿再建のキャンペーンに新しい基軸が見えず思案していた頃、武内先生に吟醸・本丸御殿を紹介した酒席で、今は使われていない金虎の酒蔵活用コンサートを持ちかけ、試飲方々、現場を見てみようと言われお連れすることになった。最盛期に比べれば生産量が激減し、今は空き樽が並ぶ薄暗い木造洋小屋構造の蔵の中は、音響も照明も空調も何の設備もない。舞台や客席などコンサートのイメージを酒蔵の土間に描きながら、コンサートホールでは無い酒蔵でやるのだからオペラハウスのように酒の飲めるコンサートをやってみようという酒飲みの発想で「ちょっと愉快的な酒蔵コンサート」の企画が誕生した。建築の設計やまちのプランづくりにも共通する現場の発想が豊かな企画を生む典型例だ。

早速、先生の仲間の金管酒席音楽家達の賛同を得て第一回を開催する事になった。口コミだけの誘いにもかかわらず、PRを始めて1ヶ月足らずで80人ほどの聴衆が集まり、方破れなコンサートの面白さが、少数だが本格的なクラシックファンから日頃音楽になじみのない人まで幅広い共感を集めることとなった。当初は主宰者が考えていなかった次回開催の声を呼び、以後金管と木管の交互で年2回の定期開催となり、常連のリピーターと新規参加の聴衆を交えながら毎回参加者を増やし続けて、今では100人を超える状態になっている。これこそまさに酒が取り持つ宴の縁のたまものだ。

このまま続ければ来年は10回目になる。国際博覧会の年でもあるし、まちなか勝手博覧会としては少し趣向を凝らしてみようかと思ったりもしている。こんな取り組みをさりげなく、楽しくやって見たいと思われる方には、知恵をお貸しします。ご相談下さい。

奥貝塚・彩の谷「たわわ」がグランドオープン

〔技術参与／中川 天開〕

今から60年ほど前、この地には、農業用ダムが建設されることになっていました。当社も昭和48年頃、府の東南レクリエーションゾーンとして計画づくりに携わっていましたが、社会情勢の変化から計画が中止されました。平成元年から、大阪府、貝塚市、地元町会などが跡地の有効活用や地域の発展に向けた将来への取り組みについて議論をかさね、農業庭園として生まれ変わることになり、4月25日、奥貝塚・彩の谷「たわわ」としてグランドオープンしました。

「たわわ」というネーミングは、四季折々に見える自然環境の環(わ)と周辺施設との輪(わ)、さらに、交流の和(わ)を願い名付けられたもので、アルパックがお手伝いさせていただく以前から、デザイン事務所であるバードデザインハウスによるCI計画が進められ決まったものです。アルパックは「たわわ」の全体植栽計画の助言・実施設計、サイン計画実施設計、事業概要書作成、開園式典企画などのお手伝いをさせていただきました。

さて、12haを有する「たわわ」の管理運営は、地元の営農者の皆さんを中心に設立された農事組合法人によって進められており、朝市会場である「彩の店」、いちご園、ぶどう園、いもほり園、花摘み園、その他のつみ取り園、161区画(45m²/1区画)の貸農園「彩農園」など園内施設の全ての管理・運営を担っています。彩農園は161区画の全てがオーナーが決定し、平日の日中でも農作業を楽しんでおられる方が見受けられるほど盛況です。また、彩の店では生産者がわかる直売が行われ、地域特産である「馬場ナス」や「アンデスレッド」という赤くて小降りのジャガイモなど、なかなか入手困難な野菜が購入でき、こちらも盛況のようです。花摘



出典：パンフレット
阪和自動車道貝塚ICから車で15分

み園では7月中旬から8月下旬にかけて、ひまわりが予定されており、黄色い花が出迎えてくれると思います。これだけの施設を管理運営していくのは大変なことです。自主独立運営を目指す最近の風潮のなか、皆さんがいちばん困っているのはおそらく運営組織のあり方だと思います。「たわわ」は幸いにも農事組合法人という母体が既にできており、農事組合法人を中心に周辺施設との連携や地域との結びつきを強めていくことで盤石の体制ができていくのではないのでしょうか。「農業庭園」という新しい概念の空間が、もっと開かれた舞台となっていくことを期待し、これからも見守っていきたいと思っています。

問い合わせ先：農事組合法人「奥貝塚・彩の谷」
貝塚市馬場3081
TEL:0724-46-8000(月/不可)



貸し農園はオーナーの個性がでていてまさしく彩り豊か



イチゴにミカンにタケノコなど、
たわわの幸がどんどん売れています

「おおさか水土里の支援ルーム」が開設されました！



〔大阪事務所／原田 弘之〕

「水土里」と書いて、「みどり」と読みます。ため池や水路、農地、集落、里山など、いわゆる農空間やそこにある資源を表す当て字です。「おおさか水土里の支援ルーム」は、大阪府内にある農空間を、府民と守り、育てる活動を支援していくために、平成15年11月、大阪府土地改良事業団体連合会内に開設されました。これまで農空間の整備と管理を専ら行ってきた土地改良団体が、農空間の「活用」や「学習」「活動支援」などに取り組み始めた例として注目したいと思います。

役割は「フィールド」「人材」「情報」3つのバンク

水土里の支援ルームは、以下の図のように3つの役割を持っています。1つめは、府民が学習活動できる場を、ため池や水路の管理者に登録してもらい、府民に紹介する「学習フィールドバンク」です。2つめは、農空間での学習活動を支える人材を、育成・登録してもらい、府民に紹介する「学習人材バンク」です。3つめは学習活動のプログラムや事例、取り組みやイベント、学習道具や教材などを紹介する「学習情報バンク」です。

水土里のインタープリターが16名誕生！

まずは人材育成から取り組み始め、「水土里のインタープリター入門講座」と題して、これまで昨年11月と今年6月の2回開催されまし

た。各回とも丸2日間の集中講座を受け、計16名の方が修了、水土里のインタープリターとして登録されました。「インタープリター」とは一般に、通訳者や翻訳書の意味ですが、この場合、実体験や五感等を通して、農空間の実態や意味などに自ら気づいてもらう、それを促す人という意味合いで捉えています。入門講座では、講義や実技、演習などを踏まえ、落ち葉や樹木、風景、生き物などを題材に、各自、自分の学習プログラムを企画・実施しました。

お呼び下さい！ 出かけて行きます。

既に今年の1月にはため池で、4月には水路で、水土里のインタープリターによる子ども向けの学習イベントが開催されました。今後は、インタープリターのさらなる育成や、継続的な訓練・学習も続けられる予定ですが、実際に現場で活動し、経験を積んでいくことがより重視されています。小中学校の授業や、地域の子ども会、ため池や水路などの催しやイベントに、どんどんお呼び下さい。水土里の支援ルームに代わって、宣伝しておきます。

【おおさか水土里の支援ルームの問い合わせ先】
大阪府土地改良事業団体連合会（水土里ネット大阪）内 TEL (06) 6941-4897
E-mail : daidoren@giga.ocn.ne.jp
URL : <http://www8.ocn.ne.jp/~daidoren/midorishien/index.htm>



出典：パンフレット

子どもと年寄り

[取締役会長／三輪 泰司]

新緑の5月。子どもの日に、「こども環境学会・Association for Children's Environment」が誕生しました。設立発起人に連なっておりましてので、4日から2日間、参加しました。

こどもになって遊ぼう

いま私は72歳10ヶ月です。

5月21日、日本都市計画学会より「功績賞」を頂戴しました。永い間ごくろうさんでした、とのお心遣いと拝察します。リタイアと言うか、次なる人生を設計する時と思いました。ところで、私はまだ80歳にも90歳にもなったことはありません。しかし、子どもであったことはあります。10歳であったことはあります。5歳の時も経験しています。どなたさまもみみな、絶対間違いなく、子ども時代を過ごしてこられたのです。

6月11日、三条京阪前の「だん王保育園」を訪ねました。保育室から2歳児が、わじゃわじゃわじゃと出てきてなにやら話をしてくれました。頭の白いお友達だと見てくれているのですね。

ここの乳児園は京都で初めて設計した幼児施設で、38年前に完成しました。アルバック創立の年です。金井社長のお嬢ちゃんも「だん王」の卒園児です。結婚して、もうお母さんになっています。

子どもはほんとに可愛い。犬や猫の子も可愛い。ライオンや熊の子も可愛い。しかし、子どもは小さく、弱い。ライオンの子だってハイエナやハゲワシに襲われます。子どもは自分でエ



こども環境学会設立総会（建築会館中庭風景）

サを獲得できない。親に見捨てられたら生きてゆけない。先ず、子どもは親が守ってやらねばならない存在です。

人間の子どもは学ばねばならないことが沢山あります。乳児は“赤で生まれ、青になったら進め”なんて知らない。小学校低学年にもなると、口も達者で、身のこなしは敏捷そうに見えますが、まだ遠近感や速度感が発達していない。事故に合います。

子どもは自分の成長の過程を説明したり、記録したりしませんので、観察や実験によっておとなが“研究”して解明します。専門家の地道な努力が進んでいます。殊に近年、脳科学や発達行動学の進歩は、めざましいものがあります。

初代会長に選ばれた仙田満先生は、日本建築学会の前会長で、子どもの遊び場研究で知られています。ユニセフの支援による調査研究で、子どもの参画—子どもは文化的・芸術的生活への参画能力を持っていると解明したニューヨーク市立大学のロジャー・ハート教授も駆けつけ、シンポジウムも盛り上がりました。

1000名もの参加で、会館の中庭は、子どもたちの遊び場と化し、たいそうな賑わいでした。「こども環境学会」は、子どもになって一緒に遊ぼうという点で一致するさまざまな分野の専門家に保育士やボランティアも加わり、“こども会員”の制度まであるユニークな学会です。**子どもたちはいま**

今年、4月22日は、我が国が「児童の権利に関する条約」(1989年11月20日・第44回国連総会で採択)を批准して、10周年になります。地球上では戦争や伝染病、飢餓が絶えません。昨今、子どもが被害に合う痛ましい事件が、相次いでいます。千葉大学の中村攻教授の東京都江戸川区での、小学校高学年生1,125名を対象とした調査研究によりますと、子どもたちは57.9%、およそ6割の確率で、日常的に犯罪危険と向き合っていると報告されています。私が大学院で担当している韓国の留学生・金應周君は、アルバックOBの上林研二氏の指導を得て「安全・快適な歩行空間のユニバーサルデザイ

ンに関する基礎的研究」をしています。サブテーマに、京都市教育委員会のご協力を頂いて、「通学路」を研究しました。朝7時40分頃から、通学行動と自動車の通過状況を調べました。交通事故データも調べました。警察はじめ、関係者の努力で、全国的に死亡事故は確実に減少していますが、特に低学年児のケガは増えています。

韓国でも同じような問題が起こっていました。1997年に、ソウル特別市は「歩行権確保と歩行環境改善に関する基本条例」を制定し、「歩行環境基本計画」を策定しました。歩行環境指標による評価と目標値を定め、財政状況を見た弾力性をもって「10大事業」を推進しています。推進体制は、全市部局をあげた庁内組織と、通称「都市連帯」という市民運動とパートナーシップを組んでいます。(この紹介と分析は都市計画学会誌に発表しました)子どもたちを事故から守ろうと、立ち上がったお母さんたちの運動から始まったそうです。

子どもの“育ち方”

子どもはいろんなことを学習しながら育ちます。子どもたちの歩行行動は登校時と下校時で違いがあります。下校時の行動が面白いのです。

ニュースレター120号で、京都事務所の廣部出が「地域で見守る子どもと子育て」で提起していたことだと思いました。ミチクサです。私の娘も、まだ桃山には畑がたくさんあって、ほんとの道草を採ってきたり、お百姓さんと話し込んで、いろいろ教わり、茗荷を貰ってきたりしていました。おかげで、いまでも草花のことはよく知っています。

昨今は、道で知らない人と話してはいけないなどと教えられるのは、おかしなことです。

廣部が指摘していますように、児童福祉のニーズは、産褥期・乳児期・幼児期・学齢期(小学校低学年・高学年・中学生・高校生)と3年以下の短期間に変わり、行政の担当や施設の責任主体は、医療保健・育児保育・学校教育と、めまぐるしく移動します。

頼りにしたい家庭では、子ども自身が理論立てて要求を語るのではなく、親の意識や要求は

子どもと歪みやズレが表れることしばしばです。そこで、子どもの発達という特性を基礎に、継承・総合・融合を旨とする地域社会が主体となるべきであろうと主張するのですが、その拠り所はどこでしょう。受身でなく、声を掛けるひとがいる責任主体はどこでしょう。

「だん王保育園」で、信ヶ原千恵子園長先生とお話ししました。永い年月、日々、情熱を傾け、子どもたちを守り、育て、導いている専門家がいるではありませんか。保育園の設計から相談まで含めると100ヶ園以上、あまりに身近すぎて見落としていました。私立園長は「転勤」もなく、周りにはいっぱい卒園児がいます。その子や孫もいます。昭和13年に、私が卒園した園は、当時、二条社会館とっていて、夜はお年寄りが落語を聞きにきたりしていました。子どもと年寄りが混じりあう地域社会の拠り所でした。

“年寄り”になって

子どもの発達特性を見てきました。もともと子どもは自己中心です。自己と他を意識し、社会にはルールがあって人間たちは、うまく生きていけるのだと学習します。歳をとると子どもに戻ると言いますが、ほんとうだと思えます。学習したことは剥がれていって、自己中心に戻ってしまうのです。自分勝手なお年寄りです。

ところで、乳児は意外に早い時期から、自発的な行動をするそうです。或いは、環境に反応するそうです。幼児期になりますと、見ただけで、色や形の区別、組み合わせなどやっけてきます。きっとそれは遺伝子に組み込まれているのでしょう。もう少しすると、参画能力や計画性・共同性が表れてきます。

自発的欲求とずれた、押し付けで教育されたことは、歳をとると剥がれていきますが、素直な発達と欲求に根ざした美意識や、仲間の連帯意識なら残るのではないかと思います。

「次のコース」は、自己中心の弊害に陥らないよう、奉仕の喜びを大切に、人間の発生と成長に素直に従い、年寄り力を活かす地域社会計画づくりではないか、そう考えています。

けいはんなのまちづくりを考える

[大阪事務所／杉原 五郎]

けいはんなまちづくりワークショップを開催

さる5月15日(土)、けいはんなの学研都市展示館において、第1回けいはんなまちづくりワークショップを開催しました。

京田辺、精華、木津、奈良の住民をはじめ、けいはんなに係わりのある市民団体のメンバー約50人ほどが参加し、「こんなまちにしたいナ、けいはんな」「こんな交流拠点がほしいナ」をテーマに、4つのグループに分かれてグループ討議と全体発表を行いました。この地域に住んでいる住民がけいはんなのまちづくりをテーマ自由に意見を交換しあうワークショップは、今回が初めてです。

1978年の「奥田懇」による提言、1987年の「関西文化学術研究都市建設促進法」の制定、1994年の「まちびらき」などを経て、けいはんなのまちづくりは着実に進展してきました。80近い研究機関の立地、4千人を超える研究者等、21万人余の人口集積など、ようやく学研都市らしくなってきたように思います。

けいはんなのまちづくりを考える会の活動

今回のまちづくりワークショップは、「けいはんなのまちづくりを考える会」が主催しました。会は、平成14年12月、〈けいはんなをもっと魅力と活力のあるまちにしよう〉との思いで、けいはんなに住んでいる住民有志によって設立されました。以来約1年半が経過しましたが、これまで14回の例会を開催しました。

話題提供は、けいはんなに住んでいる住民だけでなく、ここに働いている研究者や外国人など多彩な顔ぶれです。けいはんなは、人材の宝

庫だと実感しています。会では、このけいはんなにある人材を発掘し、出会いの場をつくり、そこから新たな異質結合を産み出していこうと考えています。

3月と4月には、地元精華町とアメリカ・ノーマン市との国際交流の取り組みとして、オクラホマ大学名誉教授の佐々木嘉和先生とフィレット先生による講演会、「けいはんな風土記」をまとめられた門脇禎二先生(京都府立大学名誉教授、京都橘女子大学元学長)を講師とする公開講座を開催しましたが、いずれも盛況でした。

けいはんなのこれから

アルバックは、関西学研都市とは構想の初期から長いおつきあいをしてきました。奥田懇の事務局として構想のとりまとめとその具体化、関係者・関係機関の熱意を束ねる役割などを担ってきました。私自身も、京都市域の建設基本計画や地元精華町の学研都市とまちづくりに係る調査研究、田辺・精華・木津3町行政連絡会(後の3市町行連)による各種調査などに係わってきました。現在は、包括的研究交流窓口(けいはんなコネクト)の創設に向けて頑張っています。また、セカンドステージプランに基づく新世紀戦略プログラムの見直しやテストイングフィールド(実証実験)のための受け皿づくりにも力を注いでいます。

学研都市の中心クラスター・精華西木津地区にある木津川台に移り住んで今年で早や14年。岐阜の田舎を別にすると、このけいはんなの地は、私にとって第二のふるさとといった感もあります。けいはんなに対する深い思いをベースに、これからもけいはんなのまちづくりに情熱を注いでいきたいと思えます。



ワークショップ



公開講座

国道1号起終点都市再生の連携アピール

〔大阪事務所／馬場 正哲〕

都市の再整備に市街地再開発事業が力を発揮した時代がありました。公共施設や防災整備、高度利用の促進や住宅供給が目標だった時代です。今日都市は、多様で複雑な問題や課題への対応が求められています。しかし基本は、地域の主体力に尽きると考えられます。再開発に受動的に翻弄された「曽根崎地区」で地域の自我の再生に小さな動きが始まりました。

曽根崎地区の再開発

曽根崎地区は、近松門左衛門の「曽根崎心中」で名高いお初天神の門前に栄えた大阪キタの盛り場としての歴史を受け継ぐとともに、国際都市大阪の玄関口として高次都市機能集積の一翼を担うべき地区でもあります。

大阪の中老年層の誰もが親しんだ地ともいえますが、狭い道路に老朽化した木造建物が細分化された土地に密集し、現状では自力更新が難しく、防災上の問題や繁華街としての衰退、防犯等が大きな課題となっています。

都市再生の取り組みへ

今般、都市再生特別措置法の都市再生緊急整備地域に指定されたのを契機に、再開発を待つのではなく、当り前に地域のことを地域で考えることから始めようと、和歌山大学濱田学昭教授を座長に「曽根崎都市再生研究会」を有志で始めています。

地域が小さなことから先導的に動き、ビジョンを共有する場づくりとして、先ず、かつての賑わい中心で大阪の道路元標にある「梅田新道」の人に優しい交差点の回復を目標に掲げました。

ひよんなことから日本橋への交流アピール

そんな折り、研究会メンバーの河内厚郎さんから、中高年齢者の生涯現役を目指すNPO法人ナルク（NALC：ニッポン・アクティブライフ・クラブ）が、設立10周年記念に「東海道五十七次・ナルクウオーク」を断行するとの話が紹介されました。

この元気にあやかりつつ、国道1号の起終点の縁により、東西の交通要衝と都市再生に取り組む歴史地区が連携して日本や東西都市の再生に向けた取り組みを模索すべく、連携のメッ



大阪市役所前、大平光代助役の激励で出発セージを送ることにしてはどうかということになり、即実行ということとなりました。

曽根崎から日本橋へ出発

平成16年4月14日、午前12時に露天神社（お初天神）で、吉澤克規宮司により安全祈願式を挙行、梅田新道交差点の大阪市道路元標前で都市再生連携メッセージを曽根崎都市再生研究会世話役の香田亘弘さんより、東海道五十七次・ナルクウオーク実行委員会の高畑敬一委員長（ナルク会長）へ託しました。

メッセージの手渡し式

1ヶ月後の5月14日、一行は無事東京日本橋に到着、名橋「日本橋」保存会のおはからいで、12時15分、滝の広場で手渡し式を挙行することが出来ました。

メッセージは、日本橋創架（江戸開府）400年記念への祝辞と現代の東海道＝国道1号の起終点のまちづくり連携、そして、「みち」の再考から、人間回復回遊による都市再生の呼掛けです。

井上和雄保存会会長（三越相談役）からは、労いのお言葉と連携への賛意が述べられました。これからの連携の歩みとともに曽根崎の人々の着実な動きが楽しみです。



名橋「日本橋」保存会井上和雄会長へメッセージを手渡し

三輪会長、日本都市計画学会功績賞を授賞

〔代表取締役社長／金井 萬造〕

弊社、三輪泰司会長が日本都市計画学会功績賞を去る5月21日の学会総会において授賞されました。

弊社創業から37年間、三輪会長及びアルパック(株)地域計画建築研究所が関わらせていただいた業務の関係者の皆様、都市計画の活動に関係しご支援いただいた皆様方に心からお礼を申し上げる次第です。

所員一同、OB一同おめでたいことと心から喜んでおります。

都市計画コンサルタントとして、また建設コンサルタントとしての授賞者はまだ少数であり、三輪会長が京都という地域にこだわり、京都を中心とする地域づくり、国土づくり、様々な施設の建設に関わる業務を基礎に活動されてきたことが評価されたことは、21世紀の地域の振興や自立が地域づくりの重要テーマになってきている時期に、時代と地域を見直した地道な活動が学会の功績賞となったことと合いまって大変喜んでるところです。

功績賞の授賞の理由としての活動は、生活空間の創造を対象とした政策提言から計画の立案、設計デザインの現場、市民参加のワークショップや事業コーディネートなど現在のテーマに直結する内容を永年、多岐にわたってやってきたことがあげられています。

主なものを列挙すると、関西学術研究都市構想の推進に関しては四半世紀前の1977年が構想の着手の段階からの関わりです。現在までの事業推進に広く関わってきた功績は関西の都市計画における非常に大きな功績として認められました。

さらに、京都市、奈良市等の風致・景観政策にも組織的に関与され、21世紀の主要なテーマになっている美しい国土づくり、景観づくりに貢献できたこと。1988年のJR京都駅改築にあたっては、国際的コンペのプロフェッショナルアドバイザーを務めるなど京都の地域特性である歴史的景観の保全と創造活動に関わってきたことも評価されました。

社会経済活動として京都経済同友会の活動を通して「京都副都心構想」を企業家の立場から提言するなど、京都市の都市計画・都市政策に大きく貢献したことも評価されました。

地域の学会活動を推進するため都市計画学会関西支部の創設期に尽力し、学会の活動にも広く貢献していることも評価されています。現在、関西支部顧問に就任しています。

三輪会長の授賞理由を述べましたが、関係した業務は数多く、記述させていただいていない関係の皆様には失礼させていただいています。

再度、三輪会長の授賞にあたり、これまでご支援、ご協力をいただいている皆様に深くお礼申し上げます。

アルパック(株)地域計画建築研究所所員及びOBのメンバーは原点に立ち戻って地域の振興のためにさらなる努力を傾けてまいりますのでよろしくご指導をお願い申し上げます。

現在、都市再生、地域再生の課題が明確になっている時代に地域づくりに貢献すると共に役割を発揮してまいりたいと念じています。

三輪会長の功績を所員やOBが全力で総合力を発揮して、連携とネットワーク力を発揮していくことが、新しい課題であると再認識している次第です。



「新・映画でまなぶ世界史1」

○著者 家長知史

○発行 地歴社

映画を見る上で、いつも悩んでしまうのは、「原作が先か、映画が先か」ということである。一つの作品で原作と映画の両方を見るのは、時間的になかなかできないが、実現すると映画を数倍楽しむことができる。

原作を先に読んだ場合、活字になった登場人物とその心理描写、背景など、イメージがふくらみ空想する楽しさがある。その後、映画を観ると上映時間と制作費の関係上、必要と思われる筋や登場人物がカットされているとがっかりすることもしばしば。

一方、映画を先に観た場合、配役があたり役だったり、インパクトの強いシーンを目の当たりにすると、後で読む原作をさらに盛りたてる結果となる。もちろん音響効果も重要な要素の一つだ。また、観るということは、活字以上に情報量が多いので、原作で表現しきれないもの（風景、建物、衣装、その時代の灯りの再現など）までを観ることになる。当然、作り手の力量が問われるわけだが、空想する楽しみが

紹介者／大阪事務所 中村 孝子

半減して得るものがあるどうかは、映画のでき次第ということだ。

さて、話を本題に戻そう。本書は、映画好きの友人が薦めてくれたもの。京都府立高校の教諭が執筆したもので、教師が映画を世界史の教材として使う視点で書かれている。

そもそも世界史といえば、教科書では見慣れない人名や地名などの羅列（しかも数行の説明）、授業では受け身で学んだという印象が強く、歴史映画を観るとしても詳しくは知らない。また、映画の解説本を読んだとしても、制作の経緯、役者や監督の解説に重点をおいたものが多く、時代背景までは分からない。

本書は、「映画を見る前に」として、時代背景や人物像などについて詳細な解説がされているだけでなく、さらにどのような映画か、映画の見方などの説明もあり、色々な切り口から楽しむことができる。

すでに観た作品（「薔薇の名前」や「グラディエーター」、「ジャンヌ・ダルク」など）も多数、紹介されているが、あらためて読んでみると、今まで、緻密な時代考証を経て制作されたにも関わらず、ストーリーだけを追ってしまいがちだった作品が、より深く理解でき、二度作品を楽しめるといった具合だ。映画好きの人にとって、魅力的な本だと思う。

さて、本書に出会ってからというもの、新たに悩みが増えてしまった。「本書が先か、映画が先か」という選択だ（再度、観ることも含め）。楽しいけれど、本当に困ってしまうのだ。※本書は続編も発行予定とのこと。

まちかど

交流型まちづくりの場 ～茨木交流倶楽部～

〔大阪事務所／中塚 一〕

全国の街なかでは、空き店舗を活用したチャレンジショップや子育て・福祉サービスの拠点等が整備されています。しかし、目的性を持った場所ではどうしても訪れる人々が限られてしまい新しい出会いが生まれにくいというジレンマが生じてしまいます。

「誰でも気軽に利用できる休憩所、ワイワイガヤガヤできる談話のためのサロンが欲しい。」特定の目的を持たないで、訪れる人々の他愛もない会話の中から、次のちょっとした地域の方々の行動が生まれてくる。そんな新しい交流型まちづくりとでも呼べるような街角の広場が、茨木市の街なか（から少し離れた旧街道沿い）に出来ました。

始まりは、中心市街地の活性化に向けた「ワークショップの続きの場」づくりでしたが、参加者のそれぞれが自主的に行っている「将棋教室」や「おもちゃの病院」から、ポルトガルギターコンサート、寄席、ポストカードやホームページの作成、花いっぱい運動、竹灯籠によ

るライトアップなどなど、老若男女、様々な人々が様々な楽しみを求めて集まってこられています。

もちろん、私のようにたこ焼き等を片手に「愚だ愚だ」言っているだけの人も温かく受け入れてもらえます。

今後は、夜も定期的に「店」をオープンするという新しいチャレンジも始まり、これからは「楽しい場所に楽しい人々が集まり、楽しいコトを行う時代」になってくることを感じております。



花咲かせ隊の講習会



概観は普通の店風だが



この夏に初登場の竹灯籠を製作中

アルパック (株)地域計画建築研究所

本 社

URL:<http://www.arpak.co.jp> E-mail:info@arpak.co.jp

京 都 事 務 所 〒600-8007京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大 阪 事 務 所 〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478

名 古 屋 事 務 所 〒460-0003名古屋市中区錦1-19-24・名古屋第一ビル8F/TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760

東 京 事 務 所 〒186-0001東京都国立市北1-1-17・田畑ビル3F/TEL(042)501-2531 FAX(042)501-3024 分室/TEL(03)3226-9130

九 州 事 務 所 (株)よかネット 〒810-0802福岡市博多区中洲中島町3-8・福岡パールビル6F/TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128